東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

モスクワ日本人学校での国際交流と英語教育を通しての学び

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 根路銘,みどり メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173778

モスクワ日本人学校での国際交流と英語教育を通しての学び

前在ロシア日本国大使館付属モスクワ日本人学校　教諭
沖縄県島尻郡八重瀬町立東風平中学校　教諭　根路銘　みどり

キーワード：小中連携の英語教育、CEFR 基準、国際交流、ロシア語、新たな視点

１．はじめに

英語教育リフォームプラン、新学習指導要領において、「小・中・高等学校を通して、1. 各学校段階の学びを円滑に接続させる、2.『英語を使って何ができるようになるか』という観点から一貫した教育目標（4 技能に係る具体的な指標の形式の目標を含む）を示す。（具体的な学習到達目標は各学校が設定する）」と英語教育の目標・内容の改善が示された。それはCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）を基にした到達目標である。これまで小学校 5・6 年生で行われていた週 1 時間の英語活動は 3・4 年生からの実施となり、小学校 5・6 年生は英語を教科として週 2 時間実施となる。中学校では、小学校からの英語教育を引き継ぎ 4 技能のバランスの取れた英語教育が求められ、各段階に応じてCan-Doリストの形で到達目標を各学校で設定して取り組み、高校への接続を図ることになる。

モスクワ日本人学校は、小学部、中学部合わせて約 136 名の生徒が同じ校舎で学んでいる。英語教師が中学部を中心に小学部の英会話講師と連携して小学部の英会話の授業にも携わることが出来た。ロシア語中心の国で英語圏外という環境の中、いかに英語教育の充実を図るかという点において日本と似ている点がある。一方モスクワ日本人学校の特色には、同居校としてイタリア校、フィンランド校、スウェーデン校と建物を共有している。日々、多国籍の生徒を目にする機会があり年に 1 度はスポーツで交流を持っている。モスクワの現地校との交流学習では、ロシア人と触れ合う環境もあり、多様な文化に触れる機会に恵まれている。さらに、実用英語技能検定、以下「英検」への関心が高く、意欲的に挑戦し目標の級を取得する児童生徒が多い。国際理解教育、学校行事等で他国の人と交わる機会に恵まれ、日本では味わうことの少ない貴重な体験ができ、新たな視点を得られた。

２．モスクワ日本人学校設定科目「英会話」の授業について

(1) ①小学校「楽しい英会話」の取り組み

学年	週時間	A クラス担当者	O クラス担当者	教材
1 年生	25 分× 2	現地採用講師 A	現地採用講師 B・英語教師	身の回りの単語等
2 年生	25 分× 2	〃	〃	Family&Friends 1
3 年生	45 分× 1	〃	〃	Family&Friends 1
4 年生	45 分× 1	〃	〃	Family&Friends 2
5 年生	45 分× 1	〃	〃	Family&Friends 3
6 年生	45 分× 1	〃	〃	Family&Friends 4

※A、O クラスとも担当講師の頭文字。A クラスは主に英語圏で生活し、英語に慣れ親しんでいる生徒のクラス。O クラスはモスクワ日本人学校に転入し英語を始めた生徒のクラス。

※使用テキストについては、2018 年度から児童の英語力を考慮し上記のように変更した。これまで、1・2 年生は講師が準備した教材を使用し授業を行い、中学年以上は文部科学省から配布されるテキストを使用しながらOxford 出版の 3・4 年はFamily&Friends 1、5・6 年生ではFamily&Friends 2 を使用していた。

(2) 中学部「英会話」の取り組み

現地採用講師 2 人でA、O クラス 2 クラスで週 1 回実施している。テキストはOxford 出版のMatrix を 3 年かけ

て使用する。季節行事や生徒に合わせ他の教材を講師が準備することもある。

３．モスクワ日本人学校児童生徒の様子

⑴ 英検は小学校低学年から積極的に受験し、小学校で５級～２級取得者がいる。中学校では５級～２級取得者に加え、準１級・１級取得者がいる年もある。

⑵ ロシア語の授業もあるので、英語の授業でもロシア語の単語や表現が出てくる生徒もいる。

⑶ 現地校、同居校との交流会、ロシア国外の修学旅行、その他行事等で英語を話す機会がある。

⑷ 小学校１年生はロシアの保育園に通っているため、ロシア語や英語を流ちょうに話せる生徒が多い。

⑸ 学校外において

①小さいころから外国生活が長く、英語圏にいた生徒は流ちょうに話す。

②兄弟がインターナショナルスクールに通っている生徒もいて、家庭でも英語で話すことがある。

③地元のアイスホッケー、バレーボール、サッカーチーム等に所属しコーチやチームメイトと英語を使う生徒がいる。

④両親の仕事の関係で外国の客人が週に数回来て、手伝いをしながら英語を話す環境にある。

⑤英語の家庭教師をつけ力を入れている生徒もいる。

⑥ピアノ・バイオリン等のお稽古ごとの先生がロシア人で、英語でレッスンを受けている生徒がいる。

⑹ 進路は、立教ロンドン、早稲田渋谷シンガポール校、インターナショナルスクール、都立・県立の名門校、私立名門校を目指す生徒もおり、高い英語力が求められる。

４．３年間取り組んできたこと

３に示した児童生徒の様子を把握し、小学校英会話と中学校英会話・英語授業では以下のような取り組みを行った。

⑴ 実用英語技能検定

学習の到達度を図る機会として推奨したので受検者は毎回増加した。英会話講師にも試験問題を見せたり、２次面接練習を担当してもらい、英検で使われている単語や表現を共有した。そのことにより、講師も教材を扱う際には、英検問題を意識するようになった。また、各学年の英検合格者と保持者を共有することで、2018年度から使用テキストを改善するに至った。３年間の英検取得者を以下の表にまとめる。

2018年度12月現在　在籍者の英検保持者（2016年度－2018年度延べ人数）

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
5級	1	2	1	6	11	7	6	4	1
4級	1		3	3	7	10	5	10	1
3級		1	2	2	2	6	9	13	2
準2級			1	1		4	3	9	6
2級						2	3	4	6
準1級									2

※2016年当時、３年生に準１級（２名）、１級取得者が（１名）いた。

※2018年度第３回英検では各級とも合格者が増えた。（最終データは帰任後のなので記載していない）

以上の点を踏まえ、少人数という特性を生かし、個に応じた授業ができるように次年度の小・中学部英会話、英語の到達目標を意識し授業改善を目指した。

⑵ 交流学習の取り組み

①中学部ロシア現地校との交流会

年に２回実施。初回はロシア現地校を迎え、日本文化紹介をロシア語でのプレゼンテーション、文化体験

（書写、折り紙、昔遊び、おにぎり作り）をグループ毎に行った。文化体験では説明やコミュニケーションを図るとき、ロシア語で表現できないことは英語を使って行っていた。2018年度は交流内容の充実を図るため‘おもてなし’をテーマに「祭り体験」を生徒自らが企画し、出店でのゲーム、お好み焼き作り体験、東京オリンピック音頭ブースも設け最後には皆で輪になって踊った。

2016年には、1223番校だけでなく、学習発表会をきっかけに保護者の計らいもあり1550番校とも平和学習で交流をすることになった。モスクワ日本人学校は「杉原千畝」について英語でのスピーチを1550番校はリサーチしている「勝田銀次郎と陽明丸」についてのプレゼンテーションを行った。

②同居校との交流

2018年度は、校長先生の計らいでイタリア校の職員と交流について事前に話し合いを持つ場が設定されたので、難点であった時程も調整できスポーツ交流の他に小学部も料理、英語交流が行われた。

ア　中学部数学授業交流

1年生がイタリア校の数学の授業で多角形の図形作成、3年生の数学の授業にイタリア校が参加しアプローチ方法や記号の違い等に気づいた。

イ　中学部のスポーツ交流

イタリア校の生徒とチーム編成し、互いにバスケットボールの試合をした。パスを回すときは名前を呼び合い、シュートが決まった時は、‘Good job!’等言葉をかけハイタッチをするなどできる生徒もいた。その日の日記には、その様子を見た生徒が「習った英語を使って、○○さんのように短い会話でもできるようになりたい。積極性を持たなければいけないと強く思った」と記されていた。

ウ　小学部6年生の英語授業交流

担当の先生と文学交流を計画した。日本人学校は「浦島太郎」、イタリア校はイソップ物語から1話選び互いに読み、テーマと感想の意見交換を目的とした。

第1回目：イタリア校の講堂にてジャンケン列車でIce Breakerを行い自己紹介、交流の目的を話した。

第2回目：イタリア校の講堂にてイタリア校、日本人学校の生徒合同のグループを作り物語の発表方法を決めた。ドラマでの予定が紙芝居になり互いに分担し、分担シーンの絵を描いた。

第3回目：グループで紙芝居方式で物語を発表。意見交流までは行けなかった。イタリア校の教師から児童には良い機会だったので、改善しこれからも継続していきたいと申し出があった。

この交流に関しては、英会話の授業で英語で書かれた物語を読み、アクティング等で内容も確認して取り組んだ。

エ　中学部3年生の英語授業交流

A　2017年

a）Australian Dayのオーストラリア人特別ゲストを呼んでの授業に参加。その歴史について学び、オーストラリアのお菓子や紅茶を食した。

b）日本とイタリアの文化紹介のプレゼンテーションを行った。初めに日本人学校の生徒が「日本料理とイタリア料理日本風アレンジ」についてイタリア校教室にて紹介。質疑応答もあった。次にイタリア校生徒が「イタリア紹介」で、名所、建造物、音楽、作家、ファッション、自動車等を紹介。イタリア校側の人数が多く紹介する項目が多かったので、日本人学校の生徒は興味深く聞き質問をした。

B　2018年

前年度を受けて、今年度も交流がしたいと両方の生徒から話があり教師同士も協力し継続して実現できた。今年度は、クイズ形式にするということで、日本人学校側は学校生活の中の日本文化ビデオを作り出題した。正解者には、スタンプシートにスタンプを押し、一番多くスタンプをもらった生徒に金の折り鶴をメダル代わりにプレゼントした。その後は2校合わせて4名ずつのグループでコミュニケーションを図り、時間が来たら互いにわかったことを報告した。次の時間はイタリア校が英語俳句の披露、クイズでの

文化紹介を行い、同じく多く正解した生徒へ拍手があった。

以上の交流会から生徒には英語を使用しての自己紹介、文化紹介等のプレゼンテーションや対話活動の機会があるので、今後もそれらの機会を定期的に位置づけ、その時に自己表現できるようにしなければならないと感じた。

③修学旅行

普段から、英語とロシア語を学んでいるからか、修学旅行先の言語を調べ挨拶等を覚え使おうとする場面が多々見られた。

2016年：リトアニアにて、学年別行動時に地元の日本語学科の大学生に町を案内してもらいながら大学生による日本語や英語を使用した名所の説明を受け、生徒は質問した。

2017年：チェコ、プラハにて、学年別行動の時や見学地で英語を話す機会があった。

2018年：ドイツ、ベルリンにて、学年別行動で、目的地が地図通り探せないときに1年生が積極的に「私たちがお店の人に聞いてきます」と英語を使って道を尋ね、無事に目的地へ着くことができた。

④職場体験

モスクワにある日本企業を訪れ、体験させて頂いた。2016年度は、三菱自動車様、NHK様、味の素様の三社、2018年度は、三菱自動車様、NHK様、電通様の三社であった。部署によってはロシア人からロシア語で説明を受け企業の方の通訳を介して理解していた。仕事のやりがいを学び生き方を見つめる機会になったと同時に、少数の日本人がロシア人をはじめ他国籍の人と協力して仕事をする姿を目の当たりにし、言葉やそういう姿勢の大切さを実感したのが感想に書かれていた。

5．おわりに

モスクワ日本人学校の生徒の現状を把握し、3年間小・中学校の英語教育に携わらせてもらえ、新学習指導要領とCEFRを基準にモスクワ日本人学校の英語カリキュラムを作る必要があると感じた。交流時に見せてもらったイタリア校の英語の教科書にはCEFR基準A2-B1用だと裏に記載されていた。このことからもイタリア等諸外国はCEFRを基準に英語習得を目指していることがわかり、諸外国の英語教育事情についてさらに興味を持った。

モスクワ日本人学校での3年間は、日々発見であった。日本国内とは違った環境で一丸となり多大な支援を行う家族、順応しながら意欲的に学ぶ児童生徒が頼もしかった。自ら目標を設定し英検を受験し取得級を毎回伸ばしていき、興味関心は英語学習にとどまらずロシア語や同居校・修学旅行先の言語にも及び、その言語を使ってコミュニケーションを図ろうとする姿勢に感心させられた。同居校教師同士の授業参観による交流時に、フィンランド校の校長先生が英語は小学校3学年で本格的に始め、5学年になると別のスカンジナビア半島の国の言語を学び始めるとお話していた。隣国との協力は必須なのであろう。「世界で活躍する日本人の育成」を文科省が掲げているが、モスクワ日本人学校の生徒は、現地校、同居校、修学旅行、現地での課外活動を通して、様々な人と出会いコミュニケーションを図りながら成長し、その基盤を作っていると感じた。その主な手段となるのが英語であると再認識した。英語圏外のロシアではあるが、学んだ英語を活用できる機会が日本に比べると多く英語を学習する要因となっている。他国の人と話ができ自信を持つことで、他言語習得へのきっかけにもなりうることを生徒が示してくれた。さらに言語習得だけではなく体験したことを通して、平和、文化、国際関係、経済、ひいては生き方を見つめる機会にもなっている。帰国後も「学んだ事を使って何ができるか」を念頭に到達目標を設定し、それを生徒と共有し生徒自ら実現に向けて努力する授業ができるよう研鑽を積んでいきたい。